

Scientist

大学院3年生 大植 祥弘

川崎医科大学大学院に入学し、病理学教室で定平吉都教授、森谷卓也教授のご指導のもと短期研修を行い、その後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 免疫学教室の中山睿一教授のもとで2年間、がんワクチン療法の開発研究に従事してきました。2年間の国内留学を終了し、H22年度より川崎医科大学に帰院いたします。

研究をご指導いただいた中山教授はH22年3月をもって岡山大学大学院を退官され、4月からは川崎医療福祉大学の教授にご就任されます。また当科の岡教授と中山教授の共同研究が開始され、がんワクチン療法の臨床開発と研究を行う「免疫研究室」が併設される事となり、当研究室の立ち上げに携われたことは、自分にとって大変貴重な経験となりました。

2年間、中山教授のもとで研究させていただき非常に多くの事を学びました。抄読会は、Nature、Science、Cellなどトップジャーナルを輪読し、最先端の知識の修得と共に世界的視野も学ぶ事が出来ました。「なぜ、自分がこの場にいるのか?」「人生にとって、どのような意味があるのだろうか?」と常に感じると同時に、この機会を与えてくださった岡教授に感謝の気持ちでいっぱいです。

2年間の研究内容も、日本国内の学術集会でシンポジウム、ミニシンポジウムと大きく取り上げていただき、研究内容の重要性を肌で感じる一年でした。また、H22年4月 Washington D.C.で行われた米国癌学会 (AACR) に発表でき、多くの方から賞賛を頂き、これからの研究生活により一層力が入る思いです。

中山教授は、「我々 scientistにとって必要な要素は、meticulous, eccentric, carefulnessであり、さらに重要な事は“dedication”である」と常々おっしゃっています。eccentricに関しては自信があるのですが、この“dedication”は全く自信がありません。「今日はしんどいから明日に実験しよう・・・」「今日は家族とゆっくり過ごそう・・・」などという甘い誘惑は、そこら中に散らばっていて“scienceにdedicateする”ことが如何に困難であるか・・・また、如何に恐ろしい呪いの言葉となって私を襲ってくるか・・・ということを思い知らされる日々でした。“science”は、簡単には微笑んでくれません。時には、努力しているつもりでも微笑んでくれません。実験がうまくいかなかった日などは、風呂の中で自分の行いを見つめ直し、“scienceにdedicateできなかった事”を一つ一つ思い返し、反省し、懺悔し・・・まるで修行僧もしくは修道士になった気分です。人より努力しなければ、人が寝ている時に努力しなければ、欲を出さず、ただただ真理の探究と、人類にとってより良き務めをなす事のみを願って、“scienceにdedicate”して、初めて“scientist”になれるのだと感じました。

岡山大学で共に学んだ仲間も、当科に移籍もしくは国内留学をし、研究を継続します。我々の研究が、実を結ぶのもここ数年の努力に懸かっています。少しずつですが、着実に前進しています。癌研究のみならず、感染症、アレルギーの分野とも共同研究を行い「呼吸器免疫研究室」の充実を図り、川崎医科大学呼吸器内科から世界に発信できるよう変貌を遂げたいと思っています。

平成22年4月